

## 論文の内容の要旨

氏名：及川晃希

大学院文学研究科ドイツ文学専攻：博士(文学)

論文題名：メタフィクション小説としての『ファウストゥス博士』、『選ばれし人』－後期トーマス・マン作品の語りの自己言及性について

本論文は、トーマス・マン(Thomas Mann, 1875-1955)の最晩年の2つの長編小説『ファウストゥス博士－友人によって物語られたドイツの作曲家アドリアーン・レーヴァーキューンの生涯』(*Doktor Faustus. Das Leben des deutschen Tonsetzers Adrian Leverkühn, erzählt von einem Freunde*, 1947。以下、副題は省略する)および、『選ばれし人』(*Der Erwählte*, 1951)を主な対象として、マン作品の語りの手法について検討を行ったものである。『ファウストゥス博士』と『選ばれし人』は続けて執筆された作品で、また、「小説を書くということ」自体を題材とした「メタフィクション小説」であるという共通点があり、それゆえ本論ではこの2つの作品を併せて取り上げた。

後期マン作品の語りの独自性に注目することは近年の研究の傾向でもある。マンは従来、市民的リアリズムを脱しきれない19世紀的な作家と見なされることが多かったが、近年では、特に後期のマン作品の語りの持つ特質、つまり、小説が人工物であり、虚構であることを作品自身が絶えず明かし、読者と戯れようとする「自己言及」的な手法について、ヴィクトール・ジュメガチ、山本佳樹、ステイーヴン・セルフらが、ローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディ』(1760-67)を継承するものと位置付け、20世紀小説が持つ豊かな生産性の一つの例として高く評価している。また、この「自己言及性」や「知的遊戯としての文学」というあり方は、スターンの伝統を継承するものであるのみならず、ウンベルト・エーコなどのポストモダン文学に繋がるものでもある。ただし、先行研究では後期のマン作品の「自己言及性」について指摘されても、作品テキストの記述に即した分析は十分に行われて来なかった。本論では、『ファウストゥス博士』、『選ばれし人』の語り手の記述を詳細に分析し、この「自己言及性」が具体的にどのように表れているかを明らかにした。そして、分析を通して、ポストモダン文学にも通じるその「新しさ」を明らかにし、マン文学の評価の転換に貢献することを目指した。また、特に『ファウストゥス博士』に関しては、その成立過程にも注目した。成立過程がこの作品、あるいはマン作品全般が持つ性質にも関わっているからである。

『ファウストゥス博士』の執筆過程について検討して明らかになったことは、マンが執筆中の作品の構想を周囲にいる友人たちと共有していることである。執筆中の作品の内容を明らかにすることによって、結果的に外の世界に働きかけて、周りの人たちをうまく巻き込んで、彼らの力も自分の創作の為に動員しながら、マンは執筆をしていると言うことが出来る。マンは「自然主義の流派を潜ってきた作家」であり、「徹底した精密描写」を行う作家であるという自覚を持っていたが、こうした描写を行う作家にとって、関連資料などは全て、精密な描写に近づくためには資すると言える。

マン作品における細密描写は登場人物の描写でも同様である。マンは、自らの作品の登場人物の描写に際して、モデルを頻繁に用いた。マンはモデル問題で取沙汰されたり、裁判にまで至ったこともあるが、人間関係を時には壊すリスクを負ってまでモデルを度々使い、登場人物の描写が生彩に富み、その人物が実在し得ると読者に感じさせることを目指した。そして、こうした努力は、マンが「登場人物は実在しておらず、言葉で作られたものに過ぎない」ことを誰よりもよく知っているからこそ行われたものである。『ヨゼフとその兄弟たち』に関する自作解説でも明らかなように、当然のことではあるが、マンは作品内でどんなに精密な描写によって現実に近づこうと試みたとしても、それが「全然起こりはしなかったこと」であることをよく知っていた。マン作品は、小説作品があくまでも言葉によって作られたフィクションであり、現実世界を反映することは出来ないという認識のもとに、象徴的な意味のシステムを作り上げているからこそ、今日において現代的に見える。マンは作品において「名前遊び」を多用したが、マンが多くの作品で行っている名前遊びは、「実在し得る名前による名前遊び」である。そして、「実在し得る名前による名前遊び」というマンの名前遊びの基本的な性格は、そのままマン作品のリアリティーの程度を反映している。

マンは『「魔の山」入門』(1939)にあるように、ゲーテに従って、芸術を「真面目な冗談」と考えていたが、芸術を遊戯的なものと捉えるマンの芸術観と関連するのが、「パロディ文学」というマン作品のあり方

である。マン作品の中で、『ヨゼフとその兄弟たち』(1933-43),『ファウストゥス博士』,『選ばれし人』は明確に下敷きにした既存のテキスト,素材の存在する作品である。また、『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』(1954)は悪漢小説,『魔の山』(1924)は教養小説(とりわけゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』)というジャンルのパロディを行っており,それ以外の作品でも部分的に他の作品のパロディを行っている例は数多くある。マンはクライストの『アンフィトリュオン』(1807)についてのエッセイで述べているように,創造というものを「無からの創造や発明」ではなく,「素材に精神の火を点じること」と考えていたのであり,こうした考えの実践がパロディ文学であった。

『ファウストゥス博士』における,ツァイトブロームとレーヴァーキューンが同一人物という設定,突き詰めれば,レーヴァーキューンがツァイトブロームの想像の産物であるという設定は,この作品が「創作する」という行為そのものを扱った「メタフィクション小説」であることと関連している。

この作品では,「手記形式」が採用されていることにより,ツァイトブロームは自意識的語り手,すなわち自分のことを作者として意識する者である。語り手の読者を強く意識した振る舞いは,『トリストラム・シャンディ』や夏目漱石の『吾輩は猫である』(1905-06)などにもみられるものであるが,ツァイトブロームの読者を強く意識した振る舞いはこの作品の「メタフィクション小説」という性質に関わっている。『ファウストゥス博士』がメタフィクション小説であることは,『トリストラム・シャンディ』や『吾輩は猫である』ほど明瞭に示されていないが,作品の随所でそのことは示唆されている。デイヴィッド・ロッジの指摘する,「みずからが虚構であるという事実」に注意を喚起するというメタフィクション小説の特徴について考える上で興味深い場面が,エヒョーのエピソードである。エヒョーのエピソードに関しては,この少年の5歳という年齢にそぐわない難解なお祈りと,ツァイトブロームの驚異的な記憶力を強調することで,「みずからが虚構であるという事実」が示唆されている。『ファウストゥス博士』のメタフィクション小説という性格について考える上でもう一つ興味深いものが,ルーディ・シュヴェールトフェーガーの運命である。レーヴァーキューンと親しくなったことにツァイトブロームが嫉妬していたルーディは,残酷な死に方をし,その殺害現場に伝記執筆の為には都合の良いことに偶然居合わせたツァイトブロームによって,ルーディが死に至る様子が迫真に迫った描写をされる。こうした記述は,この物語の語り手というよりは,実はこの物語を創作しているツァイトブロームが登場人物の生死を左右出来ることを示唆したと捉えられるものである。

『ファウストゥス博士』に続いて執筆された『選ばれし人』においても,『ファウストゥス博士』における「メタフィクション小説」という性格が継続し,さらに押し進められており,それが自己言及的な語りとして表れている。

ヴォルフガング・カイザーは,「全知の視点」を持つ『選ばれし人』の語り手「物語の精神クレメンス」を高く評価しているが,それは,小説というメディアの本質的な「虚構性」に対する意識を持たずに,その虚構性の隠蔽を「一人称」や「全知の視点の放棄」によって果たそうとしている20世紀の多くの作家たちの態度に対してカイザーが批判的だからである。「物語の精神」は,自らがあらゆる場所に遍在出来ること述べているが,人間は想像力でならあらゆる場所に遍在出来る。グリゴルスを主人公とするこの物語をクレメンスは直接見ているわけではなく,この物語は彼の頭の中から生み出されている。クレメンスは,物語の創作者であるがゆえに作品内において「全知の語り手」になる。そして,「全知の語り手」が「書き手」として登場するというこの設定が,『選ばれし人』が「みずからが虚構であるという事実や,それ自身が書かれる過程に注意を喚起する」メタフィクション小説であることを示している。

クレメンスの語りは自己言及的なものであり,メタフィクション小説の特徴である「それ自身が書かれる過程に注意を喚起する」振る舞いを行っている。クレメンスは,物語の執筆過程を明かしながら物語の中で,作者が持ついくつかの特権のようなものについて触れている。クレメンスは,作者が全知であり,物語の先行きを見通せること,物語の支配者として登場人物の生死も全て左右することが出来ることを誇示する。また,参考資料を読みながら執筆していることも明かしている。クレメンスのこうした遊戯的な振る舞いは,小説が人工物であり,虚構であることを絶えず明かすことによって,小説という媒体の構造を暴いている。

*Doktor Faustus, der Erwählte* als Metafiktion.  
Autoreflexivität der Erzählung im Spätwerk Thomas Manns.

Kohki Oikawa

In dieser Arbeit werden zwei Romane von Thomas Mann, *Doktor Faustus* (1947) und *Der Erwählte* (1951) erörtert. Ihr Schwerpunkt besteht darin, zu erläutern, wie der Romancier Thomas Mann in seinen Spätwerken die Erzählkunst entfaltet hat. Die obengenannten beiden Romane könnte man wohl weniger als realistisch, denn als „metafikional“ bezeichnen. Deshalb werden diese Werke zusammen behandelt.

Thomas Mann veranstaltete oft Lesungen seiner Werke, noch während er an ihnen arbeitete. Das wird in dieser Arbeit auch als ein wichtiger Faktor behandelt.

Das Hauptthema, das in den fünfziger Jahren über den *Doktor Faustus* von Forschern und Kritikern gern behandelt wurde, hat sich auf „das Deutschtum“ begrenzt. Aber die Tendenz der Forschung hat sich danach verändert, und man ist heute mehr auf die Erzählkunst fokussiert. In den siebziger Jahren begannen viele Forscher über den Erzähler „Zeitblom“ zu schreiben, um die Erzähltechnik von Mann zu verdeutlichen.

Thomas Manns strebt in seinen Werken nach präziser Beschreibung. Dafür sammelte er viele Materialien und benutzte als Modelle seine Bekannten.

Andererseits dachte Mann im Sinne Goethes, dass die Kunst ein Spiel sei.

Thomas Mann hat im Jahr 1910 an Hermann Hesse einen Brief geschrieben. Kurz zuvor hatte Hesse einen Artikel verfasst, in dem er den Roman *Königliche Hoheit* (1909) von Thomas Mann kritisierte. Hesse hatte geschrieben, dass Thomas Mann dem Leser schmeicheln würde. Hesse kritisierte das Spielen mit Worten in *Königliche Hoheit*. Thomas Mann ist Hesse nicht gefolgt und hat seine Darstellungsform nicht aufgegeben. Das Speilen mit Worten betont den fiktiven Charakter des Romans.

Thomas Manns Werk hat parodistischen Charakter. *Joseph und seine Brüder*, *Doktor Faustus* und *Der Erwählte* sind als eine Art von Parodie zu lesen.

Thomas Mann las bei Lesungen aus *Doktor Faustus* besonders gerne die Szene mit Fitelberg vor. Fitelberg deckt auf, dass der Roman eine Parodie ist.

Die Figur Zeitblom basiert auf *Tristram Shandy* von Laurence Sterne. Zeitblom erklärt, dass der Protagonist Adrian Leverkühn schon vor drei Jahren gestorben sei. Das heißt, er weiß alles, was er erzählen möchte. Und Zeitblom greift manchmal zeitlich vor, z.B. kündigt er vor den Tod einer Figur an. Das ist ein beabsichtigter Fehler wie in *Tristram Shandy*.

Meines Erachtens ist *Doktor Faustus* ein metafiktionaler Roman. Das zeigt sich in der Szene mit Echo (Nepomuk Schneidewein) und Rudolf Schwerdtfeger. In dieser Szene verrät Zeitblom, dass er der Urheber der Geschichte ist.

Die bisherigen Forschungen über *den Erwählten* verfolgen zwei Richtungen. Bei der ersten handelt es sich um die Problematik des Christentums, bei der zweiten um den Erzähler als den „Geist der Erzählung“.

Der Erzähler im *Erwählte* ist der so genannte auktoriale, d.h. allwissende Erzähler. Der allwissende Erzähler weiß von allem, was vorher und nachher geschieht oder geschah. Er kennt auch die Innenseite jedes Charakters, er ist allgegenwärtig, und noch dazu unsterblich.

Obwohl der allwissende Erzähler in den meisten Fällen keine Persönlichkeit hat, wird er im *Erwählte* benannt. Er heißt Clemens und ist ein Mönch. Genauer gesagt, ist er nicht „Erzähler“, sondern „Schreiber“. Das heißt, er erschafft diese Geschichte. Es ist als eine Parodie der mittelalterlichen Literatur zu verstehen.

Aber der Roman *der Erwählte* zielt auf keine Rückkehr zum Mittelalter. Zwar erzählt Thomas Mann eine mittelalterliche Legende, aber offenbar reflektiert er die Problematik unter dem Aspekt des 20.

Jahrhunderts. Im 20. Jahrhundert sind Zweifel an der Selbstverständlichkeit der Kunst entstanden. Das gibt der Kunst des 20. Jahrhunderts einen besonderen Charakter. Und das zeigt sich auch im Werk von Thomas Mann.

Auch *der Erwählte* ist ein metafiktionaler Roman. Clemens sagt auch den glücklichen Abschluss der Geschichte und das Schicksal der Charaktere voraus. Auch diese Geste charakterisiert die Eigenschaft des Romans. Clemens versucht damit, das Geheimnis der Kunst aufzudecken.